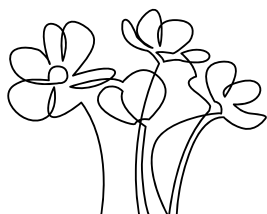


[追 悼]

中井久夫先生 本誌編集室が推したい 雑誌特集と書籍

本誌編集室



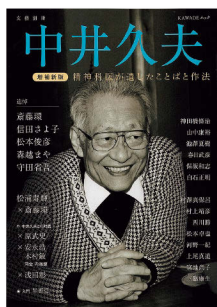
2022年8月8日、日本を代表する精神科医であり、文筆家、翻訳家としても知られた中井久夫先生が亡くなりました。先生の業績については今さら述べる必要はないでしょう。しかし、発病過程ばかりが言及されやすい統合失調症についてその寛解過程を明らかにしたこと、「統合失調症は本来治りやすい病気である」とつねづね述べていたこと、さらに、「看護できない患者はいない」と古くからケアの力に注目していたことはあらためて強調しておきたいと思います。

本欄では、中井先生の逝去後、次々に刊行された雑誌特集や書籍について、編集部のご感想をまじえつつ紹介します。



『現代思想 総特集
中井久夫1934-2022』
(2022年12月臨時増刊号)
青土社 定価1,760円

加藤寛+最小葉月、斎藤環+東畑開人による2つの「討議」のほか、この雑誌らしく各界からの「寄稿」が掲載されている。注目はポール・ヴァレリー論がデビュー作（『ヴァレリー芸術と身体哲学』）だった伊藤亜紗の論考。中井はヴァレリーの翻訳者としても知られているが、伊藤は当初、個人史を遡って解釈するようにみえた中井に反感を持っていた。しかしその後、中井のいう「こころ」とは身体に對置されるようなものではないと知り、考えを改めた。その他、上野千鶴子、大澤真幸ら20名近くの寄稿がある。



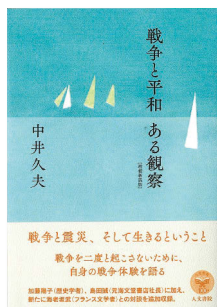
『文藝別冊
中井久夫（増補新版）
——精神科医が残した
ことばと作法』
河出書房新社 定価1,562円

2017年5月に刊行された『文藝別冊 中井久夫』に信田さよ子、松本俊彦ら5名の追悼文を加えて再刊行されたもの。保坂和志ら文学者らの寄稿に加えて、『中井久夫コレクション』と称してかつての中井本人の対談やエッセイ、さらに古い写真に自身について振り返った文章を付した「アルバム」などが再録されている。中井ファンならぜひ持っておきたい一冊。小社の編集者・白石も、『看護のための精神医学』がどのようにして復活したかなどをエピソード豊かに記している。



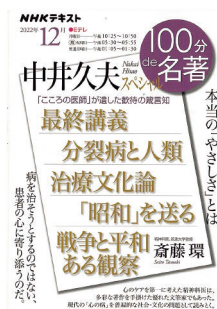
『中井久夫「精神科治療学」
掲載著作集
——臨床医の眼差し』
星和書店 定価3,960円

書名どおり、専門誌「精神科治療学」に掲載された中井の論文が網羅されている。目次を見ると、他社刊行の「中井本」には掲載されていない専門的な論考が目白押しで、眺めているだけでも楽しい。共著論文や、他の論文に対する「コメント」なども収載。弟子筋にあたる岩井圭司の序文には《生前中井先生は、「自分の書いたことが常識となって忘れ去れることを望む」ということを口にされていた。本書がそのために幾ばくかの貢献ができることを望むばかりである》と記されている。



『戦争と平和
ある観察（増補新装版）』
人文書院 定価2,530円

2015年に発行された初版に、英文学者・海老坂武との対話などを加えた増補新装版。ロシアのウクライナ侵攻をはじめ、全世界で「戦争」への耐性が低くなったこの時期に刊行された意義は大きい。戦争は「過程」であり平和は「状態」であると定義づけたうえで、『一般に「過程」は理解しやすく、ヴィヴィッドな、あるいは論理的な語りになる。これに対して「状態」は多面的で、名付けがたく、語りにくく、つかみ所がない』。この一文はそのまま、「治療」と「ケア」について述べたものと解することができる。



斎藤環著
『100分de名著
中井久夫スペシャル
——「このころの医師」が
遺した歓待の箴言知』
NHK出版 定価600円

中井を「ほぼ唯一の恩師」と仰ぐ精神科医・斎藤環によるテレビ番組のテキスト（番組は逝去後の2022年12月に放送）。『最終講義』『分裂病と人類』『治療文化論』などの名著を、臨床を含めた斎藤自らの体験を通して熱く、かつ冷静に語る。意図的に体系化・物語化を回避してきた「箴言知のひと」として中井を再定義すると同時に、「ケアのひと」として新たな光を当てている。中井の繊細さと奥深さと多面性をまっすぐに受け止めた、これ自体たいへんな名著である。

精